

セルビア・ビデオワークショップに参加して

柴田育子

2016年3月23日（火）～4月4日（月）までの13日間、セルビアで開催されたPASCH校ジャーナリズム・ワークショップに引率教員として参加しました。「セルビアという未知の国に2週間滞在する」という事実は、わくわくするような楽しみを出発前に与えてくれました。それは、年に2～3回は渡航しているドイツへ行くというルーティンワークとは全く異なる類いの喜びでした。セルビアへの渡航前日にブリュッセル空港で自爆テロ事件が起り、なんだか落ち着かない中での出発ではありましたが、PASCH校生5人とともに、期待を胸に羽田空港からセルビアへと向けて飛び立ちました。

パリの空港で、ベオグラードへの乗り換え便が予定よりもずいぶん遅れるなどのちょっとしたハプニングもありましたが、ベオグラード空港には、昨年（2015年）の夏に東京や木更津で会ったパンチエヴォのPASCH校生たちとそのご家族、そしてラドミラ・ニコリッチ先生が温かく迎えてくれました。彼らは昨年会ったときよりもずいぶんと落ち着いた雰囲気で、ここは彼らにとってのホームであり、われわれにとってはまさしくアウェイの地なのであるということを実感させられました。

とは言え、そのアウェイの地であるセルビアの人たちはどこまでも暖かく、親切でホスピタリティの精神に溢っていました。滞在中にテニス国際大会マイアミ・マスターズの決勝戦でノバク・ジョコヴィッチと錦織圭が対戦したのですが、セルビアの人たちは、「ジョコがストレートで勝つに決まってんだろう」という雰囲気などはおくびにも出さず、「今日の試合は楽しみだね」とか「ユニクロ対決だね」と声をかけてくれました。こんな親切な気配りや気遣いを海外で受けることはほとんど無く、セルビアの人たちの優しさを感じました。

今回のワークショップに参加したのは、日本のPASCH校生5名、セルビアのPASCH校生7名という少人数であり、パンチエヴォを拠点にして終始アットフォームな雰囲気の中でプログラムは進行しました。滞在先や食事の手配などすべてを取り仕切ってくれた、ウロシュ・プレディッチ・ギムナジウムのドイツ語教員ラドミラ・ニコリッチ先生に心から感謝申し上げます。また、このビデオワークショップを指導してくれたシニーシャ・ガーリッチ氏には大変お世話になりました。ゲーテ・インスティトゥート・ベオグラードのPASCH担当者であるヤコブ・コンラート氏にも感謝いたします。そしてこのワークショップに関わったセルビアと日本のすべての関係者の方々にお礼を申し上げます。

セルビアではすべてが用意されていたため、わたしたちは通貨ディナールを使う機会が殆どありませんでした。おかげで、私の手元には帰国後生徒たちから両替した通貨ディナールが大量に残っています。このディナールを使うために、再びセルビアへ渡航するスケジュールを以下、思案中です。